

ケヴィン・リンチの遺産 —追悼に替えて

The Legacy of Kevin Lynch —as a memorial tribute

筑波大学芸術学系 三村 翰弘
Mikihiro Mimura

はじめに

1984年4月25日、ケヴィン・リンチが急逝した。ボストンから程遠くない大西洋上の島、マーサズ・ヴァインヤードの彼自身のサマー・ハウスにおいて心臓発作で倒れたのだ。享年66歳、余りにも早すぎる逝去だった。5月14日、氏がボストンでもっとも好んだ建築の1つであるトゥリニティー・チャーチ（設計H・H・リチャードソン、1875）で葬儀が営まれ、ゆかりある多くの人がびとが参列したという。マサチューセッツ工科大学（MIT）の都市計画学科を今日のように世界有数の教育・研究組織に仕立てた第一の功労者でもあった。とりわけ、都市計画・都市デザイン分野における理論的な貢献は、国際的にもきわめて顕著なものがあつた。

ケヴィン・リンチの業績

氏をこの分野の一級の「理論家」として広く認知させたのは、言うまでもなく『都市のイメージ』（原著1960）であつた。都市の空間や形態などの「物的位相」に、イメージや表象作用などの「人的位相」を結合して、「イメージアビリティ」の獲得を都市計画・デザイン上の主要課題としたその主張は、きわめて斬新な問題提起であつた。それは、都市の空間や形態が、環境総体と人間との〈相互作用〉のプロセスとその結果として現出し、またすべきだとする「都市哲学」に裏打ちされているものであつた。氏の一連の理論には共通した2つの特徴がある。第一は、都市形態をつねに論点の中心に据えているという「首尾一貫性」であり、第二は、新たな理論が、従前のその深化や再検討によって創出されるという「有機的・漸進的発展性」である。そのような特徴をもちつつ氏が展開した理論の対象範囲は、都市や地域に係る主要課題のほとんどをカバーしていると見ることができる。〈形態論・空間論〉は、記したように首尾一貫した主題であり、それは、実際には『都市のイメージ』よりも数年ほど遡って一定の成果をすでに見ていたものでもあつた。『時間の中の都市』（邦題、原著1972）は、文字通り〈時間論〉をもっとも明快に示したものである。そこでは、通時的な観点は歴史的環境の保全という課題に集



晩年のケヴィン・リンチ近影

約され、さらに環境そのものの本質的・宿命的な時間的変化の特質、将来変動への予測と余地の必要性、都市の表情そのものが時間の要素を具現化するという「時空間」の一元的特質の重要性などが指摘され、空間と時間との課題がほとんど尽くされていた。すぐれた実務家でもあり続けた氏は、計画・デザイン上の技術的課題に対してもつねに配慮を怠らなかつた。『敷地計画の技法』（邦題、原著初版1964、改訂2版1971、同3版1984）は、いわばこの分野における〈技法論〉の集大成と見なすことができよう。気候・地理・空気・交通などのマクロの要素から住宅や道路の細部形状といったミクロの要素に到るまで、「敷地計画」にちなむ技術的課題が網羅されている。特筆されるべきことは、こうした技術的課題の時間的変化に対する周到な配慮である。技術の発展や状況の変化は、計画・デザイン上の従前の“技法”をしばしば無意味化してしまう。ほぼ10年に1度の割でつねに内容的な検討が行われて、時代に即した改訂版が出されているのは、まさにそうした氏の専門家としての配慮と責任感の結果でもある。

最近の理論的貢献で顕著なのは、『居住環境の計画——すぐれた都市形態の理論』（邦題、原著1981）において提起された〈規範論〉である。それは、「活力性」「感覚」「適合」「アクセス」「管理」という主要な「環境性能規範」を柱として、あらゆる文化やスケール

の人間居住環境のすぐれた創造・改変に向けて案出された、環境の理解・計画・運営のすべての根本に位置する理念系であった。形態という物的位相を基盤にしなが
ら、制度・効率・運営といった非物的位相にわたる総合
的な体系の構築がうかがえる。ここでは、「都市形態
論」が、もはやその総合性のゆえに「都市論」の領域に
まで昇華していた。この書は、文字通り氏の30年にわた
る都市に係る研究と実践とが明快な理念に統合されて一
本化した貴重な成果としてあるといえよう。

理論家としての氏の著名さの前には、卓越した実務家
としての姿はほとんど影の薄いものとなっていた。「実
務家リンチ」は大いに強調されてよい。実務家としての
並々ならぬ知見については、すでに『敷地計画の技法』
に十分にうかがえたものでもある。だが、MIT在職以
降、氏が手掛けた30をはるかに越えるアメリカ内外の主
要プロジェクトのすべては、その事情を語って雄弁であ
る。

ボストン・ウォーターフロント再開発計画（1962）の
成果の1つとして再生された、ファネウィルホール・マ
ーケットプレイスが今日年間1,300万人もの人々を誘引
している事実はそのすぐれた象徴的な傍証ともいえよ
う。プロフェッサー・プラクティショナーであった氏は
、事実すぐれた実務家であったが、むしろ在野のプラ
ンナーやデザイナーに華々しい活躍の場を与え、自らは
一步退いた形でのディレクター的な立場を進んで引受け
ていたことが多いという。氏の「成熟さ」を物語る一面
でもある。

理論家・実務家としての業績の他に強調されるべき
は、やはり大学人としてのそれであろう。きわめて優秀
な多くの人材を育成し、MITばかりでなくアメリカの
主要大学の都市計画学科や関連の公的・私的機関の隆盛
をもたらしたのである。

継承・発展させるべき遺産

氏の「遺産」でわれわれが継承すべきは、もちろん理
論的な面であろう。実務面においては、長期的な変化に
対する見通し、運営課題を含む具体的なプログラミング
の手法など、プロジェクト個々がもつすぐれた点は大い
に学ぶべきだが、政体や制度や風習の異なる場合には自ら
限界もあろう。

氏の強調してきた理論的分野は、総じてわが国の都市
計画・都市デザイン上の研究実績からすればもっとも
「弱い」部分でもある。それらは、研究対象分野として
整理・列記すれば次のようになる。

①環境知覚・意味（論）、②都市形態・構造（論）、③都
市調査方法（論）、④都市景観計画（論）、⑤都市計画制
度・運営（論）、⑥環境教育・計画参加（論）、⑦環境性
能規範・規準・指標（論）、⑧都市論

これら個々の分野（主題）におけるわが国の研究実績

の評価や、具体的な将来展望を詳述する紙幅は残念ながら
ないが、リンチの業績に止まらず、とりわけアメリカ
における都市・環境研究の蓄積との相対比較からは、こ
れら分野の彼我の差違は歴然たるものがある。

おそらく、わが国では実績上の浅さからすれば、これ
ら各分野の個別的研究による理論面の深化は、当分の間
続くものと思われるし、またその方向がある意味では必
然的でもあろう。だが、リンチの理論の特徴のひとつで
ある「有機的発展性」にも見られるように、元来、これ
ら主題は相互にきわめて関連の強いものであり、各研究
の理論的成果の説得力や有効性は、本質的にこれら相互
にわたる幅広い視座がつねに必須とされるものと考えら
れる。わが国における都市計画や建築計画の研究にきわ
めて特徴的に見られる「調査主義」「データ主義」「個
別主義」の風潮は、その対症療法的な速効性や個別性は
獲得しえても、理論一般につねに要請される普遍性や総
合性を得ることはほとんど期待できない。それは、わが
国では本来的な意味での〈都市論〉（や〈建築論〉）が
研究や論考の対象になってきていないという事情と密接
な関係があろう。都市論における総合性・普遍性は、各
分野別の研究成果の算術的総和から成立するものでは決
してないし、両者の関係はむしろ相互依存的なものであ
る。一方の卓越性も劣悪性もともに「有機的に」影響し
あうに違いない。リンチは、実質的な最後の著書『居住
環境……すぐれた都市形態……』（前出）において、ま
さしくこの有機的関連性を通して新たな〈都市論〉を提
起した。いまや、各主題の深化と相互の有機的関係性へ
の視座という、一見、二律背反的な研究姿勢こそが、こ
れら研究分野の稔りある前進を可能とするに違いない。

おわりに

ケヴィン・リンチが次々に提起した視点や方法は、つ
ねに新しく、普遍的だった。居住者や市民の存在がつね
に論考の中核にあった。その早すぎる逝去は、人間リン
チを知る者にとっては、ますますその「人間都市論」の
貴重さを偲ばさずにはおかない。われわれが継承すべき
真の視座の中心は、まさにここにあるともいえよう。

ケヴィン・リンチ略歴

1918年シカゴ生まれ。イェール大学卒業。タリアセ
ン、レンセレーア工芸研究所、陸軍技術隊を経て、M
IT都市計画学科卒。グレンズボロ都市計画局勤務を
経て、1948年から1978年までMIT都市計画学科スタ
ッフ。1978～84年同大名誉教授。カー・リンチ・アソ
シエイツ主宰。1984年4月25日没。